

中等教育コース(英語教育専攻)、「英語学 1」(単位登録者数 30 名)
担当教員: 秋山正宏 (英語教育講座)

「英語学 1 (2017 年度後期)」: 授業評価アンケート結果とその考察

「英語学 1」は、英語教員免許状取得希望学生にとっての選択必修科目である。授業の目標、到達目標、授業概要についてはウェブ上のシラバスを参照されたい。DP の上では、「... 得意とする分野の専門的知識を修得している(知識・理解)」に対応することが意図された授業である。

この授業は全ての回が担当者自作のワークシートに基づいて進められた。授業全体への導入に充てた初回および前期科目「英語学概論」の復習を行った第 2~4 回目を除く、毎回の授業時に内容確認シート(出席カードを兼ねる)を用意し、学んだ内容を授業終了時に振り返ってもらった(ただし講義の進行状況の事情で用意した内容確認シートを使用出来ない回が 1 回あった)。内容確認シートは、採点した上で、必要があればコメントおよび質問に対する回答を添えて返却した(最終回授業時のものを除く)。成績評価には、持ち帰りワークシートを使用した。

最終授業時に行った授業評価アンケートの結果は以下の通りである(回答者数 24)。

A あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか。(1. 全く意欲がわかなかった: 1/24; 2. あまり意欲的に取り組まなかった: 3/24; 3. どちらとも言えない: 5/24; 4. やや意欲的に取り組んだ: 12/24; 5. 非常に意欲的に取り組んだ: 3/24; 平均値: 3.67)

肯定的評価(4 または 5)をした学生数が 15/24 (62.5%)であった。今年度初めて開講された新カリキュラムの科目であるため、前年度との単純な比較を行うことは出来ない。今後も、より多くの学生が意欲的に取り組める授業を行うことに努めていきたい。

B この授業で使われた授業資料/ワークシートについてお尋ねします。

B-1 全般的に言って、授業資料/ワークシートの作業の難易度についてどう思いますか。(1. 非常に難しかった: 0/24; 2. やや難しかった: 15/24; 3. ちょうどよい: 6/24; 4. 比較的やさしかった: 3/24; 5. 非常にやさしかった: 0/24; 平均値: 2.50)

3 を選択した学生が 6 名 (25%), 2 を選択した学生が 15 名 (62.5%)であった。具体的な数値はここでは示さないが、2 を選択した学生の比率は担当者の他の授業に比べても高いものとなった。問 A に否定的評価(1 あるいは

2)をした学生 4 名の内 3 名(75%)が、この間でも否定的評価をしている。授業資料/ワークシートに感じる難しさが、授業への取り組みへの意欲を削いでいる可能性も否定は出来ない。全ワークシート/資料を通した体系性を維持した上で、部分的な修正を行うことは難しい作業だが、次年度以降微調整を行いつつ授業を展開することに努めたい。

B-2 授業資料/ワークシートを通して学んだ内容は、(難易度は別にして)あなたにとっておもしろい(知的好奇心をくすぐる、喚起する、といった意味で)ものでしたか。(1. 全くおもしろくなかった: 0/24; 2. あまりおもしろくなかった: 4/24; 3. どちらともいえない: 7/24; 4. 比較のおもしろかった: 12/24; 5. 非常におもしろかった: 1/24; 平均値: 3.42)

肯定的評価をした学生数は 13/24 (54.1%)であり、辛うじて過半数である。また否定的評価(1 あるいは 2)が 4 名の学生から寄せられている。問 A に否定的評価をし、かつこの間に肯定的評価をした学生は 0 名であり、授業内容に興味を持つか否かと、授業への取り組みの意欲の高低には相関があるようだ。問 B-1 で 1 ないしは 2 を選んだ学生 15 名の内 7 名(46.7%)がこの間には肯定的評価をしている(逆に、この間に肯定的評価をした学生 13 名の内 7 名(53.8%)が問 B-1 で 1 あるいは 2 を選択)。授業資料/ワークシートに難しさを感じるから、即この授業内容に興味を持ってない、という訳ではないようだ。いずれにせよ、言語の規則性を科学的に考えることの面白さが伝わるような授業にする工夫を今後も重ねたい。

B-3 この授業で取り上げた以下の具体的な話題の中で、特に興味深いと思うもの、関心を持ったものがあれば括弧の中に「○」を記入して下さい。(第 4 回 時制移動と do による支え: 7/24; 第 5 回 文の構造と再帰代名詞、代名詞の意味解釈: 5/24; 第 6 回 疑問文と wh 移動: 6/24; 第 7 回 補部と付加部の区別: 3/24; 第 8-9 回 関係節: 5/24; 第 10-11 回 wh 移動と移動に課される制約: 7/24; 第 12 回 助動詞 Have/Be の統語論: 6/24; 第 13-14 回 助動詞の強形、弱形、縮約形: 8/24; 第 15 回 派生に課される制約: 11/24)

最終授業時(第 15 回)にこのアンケート調査を行ったためか、最後の 3 回に扱った内容の印象が強いとの結果が得られた。ただし、第

10, 11 回に扱った「wh 移動と移動に課される制約」の印象も強いとの結果が得られた。この内容は、カリキュラム改定に伴う英語学・言語学関連の授業数の増加にあわせて新規に作成したものであり、次年度以降も改善を試みつつ継続して使用したいと考えている。なお第 13-15 回に扱った内容も新規に作成したものである。

C この授業では、前期開講の「英語学概論」の内容を復習する回が 3, 4 回ありました(具体的には、第 2~4 回および第 12 回)。その点についてお尋ねします。

C-1 あなたは「英語学概論」を履修済みですか。(1. 履修済みである: 20/24; 2. 履修済みでない(カリキュラムの関係で履修しなくても良い人もこちらにマークして下さい): 4/20)

C-2 「英語学概論」の復習となった回について、どのように思いますか。例えば、統語論の初歩についての復習なしに、「節の構造と再帰代名詞の意味解釈」の話から具体的な話が始まったら、どうだったか、というようなことを考えてみて下さい。(1. 不必要である: 0/24; 2. なくても良い: 3/24; 3. どちらとも言えない: 6/24; 4. あった方がよい: 11/24; 5. ぜひ必要である: 3/24; 無回答: 1/24)

新カリキュラムの運用開始に伴い、この授業に先立って 2 年生前期科目として開講される「英語学概論」の内容を前提とする内容がこの授業では展開された。ただし、旧カリキュラムの適用対象となる、あるいはそうでなくても履修計画の関係で「英語学概論」を受講していない学生がいたこともあり、同授業で扱った関連内容を復習する回を 4 回設けた(第 2~4, 12 回)。「英語学概論」を履修済みでない 4 名の内、3 名がこの間で 4 ないしは 5 を選択した。また同科目を履修済みの学生 20 名(この問への無回答 1 名を含む)の内、11 名がこの間で 4 ないしは 5 を選択した。新カリキュラムに完全移行後も、時間配分に注意しつつ、既習内容を扱う回を用意する必要は今後もあるように感じた。

D 内容確認シートについてお尋ねします。残念ながら内容確認シートを使わなかった/使えなかった回もありましたが、内容確認シートは、当該の回に学んだ内容を振り返ったり、理解を深めたりするのに有益だと思えましたか。(1. 全く有益には思えなかった: 0/24; 2. あまり有益には思えなかった: 1/24; 3. どちらとも言えない: 5; 4. 比較的有益なように思えた: 13/24; 5. 非常に有益なように思えた: 4/24; 無回答 1/24; 平均値: 3.87 (無回答 1 名を除く))

肯定的評価をした学生が 17 名 (71%), 否定的評価をした学生が 1 名 (4%)であり、内容確認シートの意義については比較的高い評価を得たようである。内容確認シートは平常点を算出する上で重要なアイテムでもあり、次年度以降も改善を加えつつ使用を継続して行きたい。

E あなたは、この授業を通して、外国語としての英語、あるいはより一般的に人間の言語が持つ規則性に興味・関心が向くようになりましたか。(1. 全くそういった興味・関心が持てなかった: 0/24; 2. あまりそういった興味・関心が持てなかった: 1/24; 3. どちらとも言えない: 4/24; 4. そういった興味・関心をやや持つようになった: 13/24; 5. そういった興味・関心を非常に強く持つようになった: 5/24; 無回答: 1/24; 平均値: 3.96 (無回答 1 名を除く))

肯定的評価をした学生数が 18 名 (75%)であり、他の質問項目よりも高い結果が得られた。ある程度言語の規則性についての関心を掻き立てることが出来たと考えてよいだろう。

F 最後にこの授業全体を振り返って、何か一言

この間に回答した学生数は 15 名であったが、授業について否定的な評価を書いた学生はいなかった。

まとめ: アンケート結果から判断する限り、今年度の受講者にとって今年度のこの授業は、授業資料/ワークシートがやや難しい授業であったようである(上記 B-1, だからといって、興味が持てなかった訳ではないようだ)。その反面言語の規則性についての興味をかき立てるにはある程度成功しているようである(上記 E)。

地域社会を核とした教育と研究のつながりについて: この点を強く意識した授業内容は設定しなかった。もちろん、この授業で扱った内容は、地球上のどの地域で英語教員になるにせよ重要な事柄であると考えている。その意味では、地域社会、我が国、この地球全体を意識した授業内容であったのかも知れない(授業担当者にとって、これはどうでもよいことであるが)。それはともあれ、英語学にせよ、より一般的に言語学にせよ、愛媛という特定の地域のためだけに存在する研究分野では、もちろんない。ただし、学習指導要領等を再度見直して、この授業以外の英語学関連の授業も併せて、取り扱う内容、展開の順番等の検討は続けていきたい。